

## 特集にあたって

The preface of this feature articles

加藤和彦\*

『その日、私は珍しくジャケットをはおり、つくばの共用講堂で何かの研修を受講していました。午後2時46分、いきなりの揺れ。キャスターをロックしてテーブルが動き出し、畳んであった可動式の間仕切り壁が大きく揺れだしました。揺れは長く続き、立っていることもできない有様……揺れが収まっても研修を再開できる状況にはなく、終了して解散。

自分の居室がある建物に戻ると、職員などは屋外に避難して右往左往している状況。そこに見当たらない職員の安否や自宅の状況の確認をしようにも電話もつながりにくい状況。また、いったい震源がどこでどれくらい大きな地震なのかよくわからず……。

結局、帰宅が指示されたのは午後4時ころ。私の自宅は徒歩30分程度の距離でしたが、徒歩での帰宅途上では信号が停電していたため道路が大渋滞。電車通勤の職員などはつくば駅周辺で夜を明かした方もいた模様。

自宅に帰ると、家財道具の倒壊・落下はほとんどありませんでしたが、断水と停電。今晚をどう過ごすかを思案しつつ、妻は当時小学6年生の娘を引き取りに小学校へ。午後6時ころには隣町の高校に自転車通学している当時高校1年生の息子も無事帰宅。その夜はろうそくと乾電池式のランタンで灯りをともし、冷蔵庫にあるもので夕食を食べ、一つの部屋に各自の布団を集めて家族4人一緒に就寝。

翌朝(12日)、幸いにして上水道もわずかながらでできるようになり、また電気も復旧。テレビを見ることができるようになって、深刻な被害の状況を視覚的に認識。

日中、自転車で近隣の食料品店にでかけてみましたが、調理が不要な食料品(とタバコ)はすでに売り切れ。途中のガソリンスタンドは給油待ちの車で

混雑し、その渋滞の列は幹線道路へと長く延伸。

そして、発生した福島第一原発1号機の水素爆発。家族3人だけでも島根の実家に避難させようと13日の羽田発出雲空港行の航空券を手配。つくばから羽田への移動経路を息子と確認し、当日、時間にかなりの余裕を持たせて車でつくば駅に送るも、目前で駅入口のシャッターが降り、我が家のつくば脱出作戦は失敗。』

……これが東日本大震災発生から3日間の私の被災体験です。

いうまでもなく、震源地や福島第一原発に近い地域には、私の体験よりもはるかに過酷な被害を受けた方々が数多くおられます。

東日本大震災発生から10年が経過した現在、人類は「新型コロナウイルス」というまったく別の自然の脅威に曝され、「復興五輪」として2020年に開催されるはずであった東京オリンピックも、「新型コロナ禍克服五輪」へと置き換えられて昨年2021年に開催されました。

しかし、それでも私たちは東日本大震災のことを忘れてはなりません。特に太陽エネルギーをはじめとする再生可能エネルギーの研究と健全な普及促進をめざす当学会としては、地震大国である日本における原子力発電を含めたエネルギーミックスを議論するうえで、東日本大震災のその後につねに強い関心を持ち続ける必要があります。

そこで、当学会では東日本大震災と福島第一原発の過酷事故の発生から10年が経過したこの機会をとらえ、この歴史的出来事に関する特集を企画しま

\* 国立研究開発法人産業技術総合研究所

した。

まずはじめに、福島県楡葉町教育長の青木洋さんと岩手県釜石市のちをつなぐ未来館の川崎杏樹さんに、それぞれの震災体験やその後の復興への思い・取り組みを語っていただきます。実体験にもとづいてお二人が語る内容は、私の震災体験など消し飛んでしまうほど過酷で涙が出てきます。また、それでもそれぞれのふるさとの復興と体験の伝承に前向きに取り組む姿勢には胸が熱くなります。

次に、被災三県である岩手県・宮城県・福島県の当時の被災状況、復興計画の概要と現在までの状況などを、各県の復興・伝承等担当部署にご紹介いただきます。復興すべき分野はインフラ、産業、市民生活、医療、福祉、観光、教育、伝承と多岐にわたっていることを実感し、また、ソフトウェアの面での課題解決の難しさも感じました。新型コロナ禍もその妨げになっているようです。福島県ではこれに加えて、避難と帰還、除染、農林水産物の風評払拭、放射線廃棄物・汚染水の問題が語られています。

そして、東京電力ホールディングス株の佐々木緑さんには、福島第一原発の廃炉の現状と今後の計画をご紹介します。

このあと、会津電力の山田純さん、足利大学の永尾徹さん、NPO 法人バイオマス産業社会ネットワークの泊みゆきさん、東北大学の中田俊彦さんには、太陽光発電や中小水力、地熱、洋上風力などの再生可能エネルギーなどを利用した被災地域の取り組み事例をご紹介します。

最後に、東日本大震災発生直後に福島大学が設置した「うつくしまふくしま未来支援センター」の菊地芳朗さんには、被災地に所在する大学としての人材育成・教育と地域支援の取り組みをご紹介します。

この特集が、会員の皆さんそれぞれがそれぞれの震災体験の記憶を呼び覚ます機会となり、また、いままも困難に直面しながら復興に取り組む被災地域とその人々を思い、自分が何ができるかを考え、そして、再生可能エネルギー技術を健全に活用した明るい未来社会の実現に向けた研究を加速する契機になることを願っています。

なお、最後になりましたが、本特集の記事の執筆を快くお引き受けいただいた執筆者のみなさまに心より御礼申し上げます。